

タイトル	献辞(1)
著者	菱川, 善夫
引用	北海学園大学人文論集, 26・27: vi-vii
発行日	2004-03-31

## 献辞 菱川善夫先生

菱川善夫先生は、昭和52年4月より平成16年3月までの27年間にわたり本学の教育、行政に多大の貢献をされ、またこの間、多くの優れた研究を発表された。

先生は、昭和28年北海道大学文学部文学科を卒業され、同年北海道大学大学院文学研究科国文学専攻修士課程に進学、昭和30年同修士課程修了後、同年同文学研究科国文学専攻博士課程に進学、昭和33年同博士課程を単位取得退学されている。

この間、昭和32年に北海道苫小牧西高等学校教諭として着任以来、札幌西高等学校を経て、昭和37年旭川工業高等専門学校助教授、昭和44年北海道工業大学助教授、教授を歴任され、昭和52年に北海学園大学教養部に日本文学担当教授として着任、平成5年には北海学園大学に新設された人文学部教授に着任され、同11年新設の北海学園大学大学院文学研究科修士課程、同13年新設の博士課程担当教授を勤められ現在に至っている。

先生は、昭和29年に「短歌研究」新人評論賞を受賞し、新進気鋭の評論家として注目されて以来、現代短歌評論・短歌史研究の分野で第一線の活躍を長く続けて来られたわけであるが、その短歌を中心とする評論・研究業績は、著書数28(単著11点・共著17編)、研究論文数100にもものぼる多大なものであり、このすべてに触れることは至難である。

ここでは平成2年に刊行された『菱川善夫評論集成』を代表的な著作として取り上げることでその一端に言及してみたい。本書は表題に見るように著者の評論活動の集大成である。さきに触れた新人賞受賞作を中心として、抒情詩の主体をめぐる問題と前衛短歌と近代短歌の内部構造の違いを鋭く論究した緒論によって編まれた第一評論集たる『敗北の抒情』をはじめとして、「戦後短歌史論」、「昭和十年代短歌史評価をめぐる問題」等を取めた『現代短歌・美と思想』、戦後の代表的歌人、坪野哲久・塚本邦雄・岡

井隆・寺山修司等を論じた作家論集たる『戦後短歌の光源』、1970年代における現代短歌の状況と課題を展望しつつ、人間と文学、表現論のトータルな視野から、時代の本質をあきらかにしようとした論集としての『飢餓の充足 現代短歌・状況と課題』、さらに未刊評論集『彼方の自由を』を収めた本書は、一個の記念碑的大作としての評価もさることながら、今なお現代短歌評論・研究界に重い魅惑に満ちた衝撃を与え続けるものと言えるだろう。

先生は教育の面では本学の日本文学関連領域の講義・演習において熱心に学生を指導され、その情熱あふれる講義は多くの学生をして心酔せしめ、併せて学部・大学院学生への学問的な薫陶を続けて来られ、さらには全国規模の現代短歌研究会の本学における開催、そして人文学部の研究活動を学内外に開き、北海道における人文学諸分野研究の一拠点たらしむることを目的として平成14年に設立された北海道人文学会の初代会長に就かれる等、学外へむけてのさまざまな活動をも推進されている。

また本学の学内行政の面においても、先生は昭和55年～57年には学生部長を併任、昭和57年～60年には教養部長を併任、昭和63年～平成2年には図書館長を併任、平成5年～平成8年には北海学園大学人文学部長を併任され、平成11年～13年には大学院文学研究科長を併任される等、要職にあり続けて数々の問題に対処されて来られている。

如上のごとく教育、研究、学内行政の各活動を通して、菱川善夫先生の本学の発展に寄与された功績は誠に甚大なものがある。 (野坂幸弘)